

思春期・青年期保健への若者の参画 — 若者ボランティアの育成と主体化に向けた支援のあり方について —

久佐賀 真理* 俵 恭子** 大草 理美子***

要 旨

思春期・青年期保健対策の有効な手段として推奨されているピア・カウンセリング活動の育成と、ボランティアの主体的活動に向けた支援のあり方を検討するために、1年間仲間(ピア)共育活動を行ってきた6人の若者(男性3 女性3 / 平均年齢21歳)を対象に、活動の継続理由を調査した。その結果、継続理由は二つに分類され、「活動を通じての自己実現」「出会いと目標の発見」「社会的スキルの学習」という学びと自己の成長をもたらす活動動機と、「対話」「日常的な関わり」「仲間意識」という仲間とのつながりがもたらす継続の力で、両者は「成長への確信」を生み出していた。

今後ピア活動が主体的になっていくためには、傾聴や対話の力を若者同士の関係の中で実感し、自分や仲間の他に社会に目を向け実践され深められていく必要があることがわかった。

キーワード：思春期・青年期保健 仲間共育活動 主体化 成長 仲間とのつながり

1. はじめに

21世紀の母子保健のビジョンを示す「健やか親子21」は、具体的な取り組みの最初に、思春期の保健対策の強化と健康教育の推進をあげた。背景には思春期および青年期の人口妊娠中絶や性感染症、薬物乱用等の問題の深刻化がある。厚生労働省はその対策として、地域における保健、医療、福祉、教育の連携の促進、相談体制の充実、広報啓発活動の他に、新たな取り組みとしてピア・エデュケーション、ピア・カウンセリングをあげ、同世代の仲間による取り組みを推進することを明記した。これは、当事者である若者たちを思春期・青年期問題(10歳～25歳位までとする)を解決する主体として位置付けようとする新たな挑戦でもある¹⁾。現在日本各地で、性感染症や人口妊娠中絶の増加に取り組むピアエ

デュケーター、ピア・カウンセラーが、大学生を中心に養成されようとしている^{2) 3)}。

ピア・カウンセリング(Peer Counseling)は本来「人間は、機会さえ与えられれば、自分たちの問題のほとんどを解決する能力を持っている」という人間観の上に立つ手法で、1960年代の後半から様々な分野で受け入れられ、発展してきた⁴⁾。北米の公民権運動から始まり、黒人、女性、障害者など社会で抑圧されてきた人たちが、自分たちの権利擁護や相互援助の発展のために用いてきた方法の一つである。またピア・カウンセリングは、抑圧された人々が自分の人格や生活を、自分の意志でコントロールする機会をもたらそうというもので、専門家が行うカウンセリングとは基本的な価値観が異なる^{5) 6)}。

日本の思春期・青年期保健問題にピア・カ

*九州看護福祉大学 看護福祉学部 看護学科

**熊本YWCA

***西合志町社会福祉協議会

ウンセリングが導入され、地域保健の現場で用いられ始めたのは平成5年で⁷⁾、「健やか親子21」によってその傾向は加速されている。

他分野のピア・カウンセリングが、「対等な立場で話を聞き合う事により、奪われてきた自己信頼を取り戻す」⁵⁾、「同じ地域で生活している障害を持った市民が互いに存在を認め受容し合い、市民としての権利、役割を分かち合う事」⁶⁾という定義に見られるように、社会的に抑圧された者や、自分自身への信頼を失った者が、市民としての権利、自己の回復を目指し、それに見合う手法としてピア・カウンセリングを選び取ってきたのとは違い、思春期・青年期保健での用い方は、当事者でない大人や行政からの働きかけで集まった若者が、意識の共有化、問題の明確化、活動主体としての意識がない中で始まっている。

松下は、市民が健康問題解決の主体になっていくことを主体化と表現し「各人が、今現在抱えている健康問題の解決をはかればよいというのではなく、その取り組みの体験（過程）を通して、自分の健康に関する自己管理能力を身につけること、それは単に問題に対する処方的な知識や方法を知る事ではなく、自分の本来の姿がゆがめられている現状、あるいはゆがめられるであろう状況を認識し、その要因を探り解決しようとする主体的姿勢と、自分の問題を発見する事のできる力を身につける事。」と述べている⁸⁾。つまり主体化とは目先の問題の解決ではなく、若者がその問題解決への取り組み過程を通じて、自分たちの本来の姿をゆがめている状況を認識し、その要因を探り、解決しようとする姿勢と問題を発見する力を身につけることと定義できよう。よって、今後思春期・青年期保健問題において、子ども・若者が主体になるには、外部からの働きかけをきっかけに、自分

たちに共通している問題とその背後にある要因に気づき、そこに働きかけていく力の形成（主体化）が大切で、それを支えていく大人側の支援のあり方が同時に問われよう。しかし、移動が激しく地域性が薄く、大人とは別の価値観を持つ若者を捉え働きかける事は難しく、その戦略戦術は大きな課題である⁹⁾。そのような中で、活動ボランティアの存在はわれわれ大人にとって、この課題解決に欠かせないパートナーで、自ら活動に参加する彼らの活動継続要因を明らかにする事は、この活動を定着、発展させる上で意味があると考える。

この論文では、ピア・エデュケーション、ピア・カウンセリング（以下ピア活動と略す）を「共に成長する事を目指した若者の仲間共育活動」と定義する。そして、2001年から「いつでも誰でも参加できる活動」「若者達の主体的な活動」「活動の日常化」を目指し、開始した熊本YWCA/PDYYY(Young Women's Christian Association/Partnership Development of the Youth, by the Youth, for the Youth)を取り上げ、彼らは何を求めて活動したか、1年目の支援者の関わりの効果と今後の主体化に向けた課題を明らかにする。

2. 熊本YWCA/PDYYYの概略

思春期・青年期を取り巻く性の問題解決に若者が参画することを目指して、2001年から活動を開始した熊本YWCA/PDYYY（以下PDYYYと略す）は、高校生、大学生約20人（男女比は1：2、15歳～25歳）を中心に性共育活動をするグループである。いつでも誰でも参加できる体制をとっており、複数の大学、高校から口コミで集まってくる。毎週月曜日の定例会議を中心に、企画、実施、学習を交互に重ね、2001年度は年10回のワークショップを開催し、述べ300人を超える若者と

集い、性や生について考える場を共有した¹⁰⁾。団体の理念は「自分たちの力で出会い、認め合い、受容し合う事で、学校では学べない自分の中に潜在している生きる力を発見し、社会の問題解決に参画する知恵と力を育てる」で、2001年度の彼らの目標は「新たな出会いを通して自分を見つめ、新たに変わるきっかけをつかむ」であった。

活動企画は、性、パートナーシップに関連した自分達の身近な問題から出発し、話し合いを通じて内容を練り上げていく。一年目は、組織の発足と活動の日常化を目指して、支援者側は4つの介入を行った。①最初の企画提示（2001年8月に実施した事業 ラブLOVEフレンドシップ）とその後の活動機会の提供 ②性問題を語れる当事者・専門家との学習会、合同ワークショップの実施 ③組織運営に関するノウハウの提供 ④傾聴の学習と会議での実践である。もっとも重視したスキルは「聴くこと」と「話し合うこと」で、性やピア・カウンセリングについての系統だった学習は特に行ってない。性の概念も話し合いの中から作っており、知識の伝達より、知識やスキルを獲得していくプロセスを重視して展開している。

3. 調査の方法

開始当時から活動を継続してきた若者の中から、1年間活動を継続し調査協力を承諾した6人（20歳3人 22歳3人 / 男性3人 女性3人 / 学部学科：看護1人、社会福祉2人、経済3人）に、2002年3月23日団体事務所で、「1年間活動が継続したのは何故？」という問いかけで半構成グループ面接を行った。個々の振り返りが十分できるように、面接の前に全員でPDYYYの特徴についてKJ法で洗い出しをした後、グループの一人一人に焦点を当てて聞いた。所要時間はKJ法

も含めると5時間20分、インタビュー時間は3時間であった。内容はテープに録音し、1600字の原稿用紙24枚の逐語録にまとめた。平成14年10月、活動とは無関係の大学生4人と活動継続理由と思われる文節を抽出し、4つの介入との関連でグループ化した。さらに、それぞれのグループ毎にラベル付けを行い、時間的な経過を考慮し図式化した。その後、その結果を、インタビューに応じたスタッフの中で、現在も活動を継続している3人に示し、意味不明な発言、ラベル間の相互関係について再度インタビューし、図式化の再構成を行った。

4. 結果

活動継続理由として抽出された文節は32あり（表1）、4つの介入との関連で図式化したものが図1である。

「①最初の企画とその後の活動機会の提供」との関連であげられた発言は6で、「自信が欲しい」「居場所・役割がある」「自分の目的が達成できるという期待がある」等で、「活動を通じての自己実現」とラベル付けした。「②性問題を語れる当事者との学習会、合同ワークショップの実施」との関連であげられた発言は5で、「いろんな活動をしている人との出会い」「目指すものがわかる」「社会を知る」等で、「出会いと目標の発見」とラベル付けした。「③組織運営に関するノウハウの提供」との関連であげられた発言は1で、「色々なスキルを学ぶ」で、「社会的スキルの学習」とラベル付けした。「④傾聴の学習と会議での実践」との関連であげられた発言は10で、「ここでしか話さない話をとことん話す」「いろんな感情を覚え、それはなぜなのか一回考える」「あきらめていた大人との対話」「聞いてくれる、話す事が楽しい」等で、「対話」とラベル付けした。

表1 活動が継続した理由

	発言番号	活動が継続した理由	発言内容	語られた日常の問題点
20歳女性	1	自分の目的が達成できるという期待がある	自分は女性の差別、男女差別とか、DVをやってみたい。今求めていける雰囲気があるから自分はここにいる。…ここでできる、今から自分の目的ができると思うから自分はいる。	
	2	学べるものがある	活動では性を主にはできなかったですね。でもそれ以外にも学べるものがあった。心の栄養とか、聞く事とか…。しかも別に遠く離れているわけではない性の問題…。	
	3	人とのつながりができる	人とのつながりもできた。	
20歳男性	4	仲間のつながりを感じる	人間としての人としてのふれあいが大きい。ただ、その関わるうちに考える事は性っていうのはやっぱ、大事ということで。部活とかバイトでは、チーム一丸になって練習とか試合とかに臨んでいるけど、一緒にいる時間って少ないんですよ。後、連絡とかはとらないし。週1回のみんでおる時間の幅が大きいから、なんか心に残るみたいなかんじで。あと、メールとかで、やっぱ「ああ、つながってるんだな」って言うのを感じる。	部活やバイト仲間との希薄な関係
	5	聞いてくれる、話す事が楽しい	やっぱ、楽しい。自分が話したら、けっこう、ばか騒でも真剣に聞いてくれる。でキャッチボールが始まる。したら、少しづつしていくうちに「もっと聞きたいな」と思い始めて、で目を見て話し始めて…。	聞いてもらうことが少ない
	6	自分の心を落ち着かせて出すことができる	普通、あんまり結構なかのよい友達でも、ご飯食べに行ったりとか、そこまで話ったりとかはめったにないし、それを癒れさせずにできるってことは、それだけ自分の心を落ち着かせて出す事ができるんじゃないかな。	希薄な友人関係
20歳男性	7	いろんな感情を感じる。それはなぜなのと一回考える	ここでは自分がいろんな感情を感じる。それはなんでなのって一回考える。他のところでは、すっげえぶち切れたり、すっげえ喜んだり、すっげえ素なんですよ。でもここでは自分を矯正しよる。怒るだけじゃ伝わらない、泣くだけじゃ伝わらない…そおいうのがある。	会話の中で感情と向き合う事が少ない
	8	話を深く的確に捉えようとする	ここでは、すごく深く的確に捉えようとするから、話す時、やっぱ、ばって走るんじゃないかって、とととととまっとなきやいけない。みんなが見えたと思ったらまた進む。	走る会話
	9	まじめな話を延々語る	飲んでないといけないような夢の話とかできるのがいいかな。まじめな話を延々4時間とか5時間とかできるのがいい。	まじめな話は飲んから
	10	自分のまとまっていない知識を吐き出す	自分のまとまてない知識を吐き出す場が欲しかった。すっごいまとまてなくてまとめたかったものを吐き出す場が欲しかった。それをずーっとはきつづけて1年間で、結構まとまったものができた。	自分のものを吐き出す場が少ない
	11	自分の存在を残したい	「これ、役に立つんじゃない」とか、「これ、役に立ったんだけどどうかな」って、自分の存在を、俺はいろんな所に残していきたい。	
	12	みんなのものをもらいつつ、自分も返す	他の場所では、与えられるものが強すぎて自分が出すものが少なかったけど、ここの場では一方通行にしくなかつた。みんなの中にも沢山のいろんな経験、いい知識、いろんな考えがあるから、それをもらいつつ、自分のはどうかな…みたいな。みんなから沢山のものを俺はもらっている。だからそれを返したい。	与えられるものが強すぎて自分が出すものが少ない
13	みんなのことが好き	俺、やっぱり、みんなの事が大好きっていうのが第1かな。		

	14	束縛されない、自分の視点を損なわれずにすむ	束縛しない事がいいな。他の組織では、自分がどれかの役割に固定されるんじゃないかって、全体を見ながら、その中で足りない部分を埋めていく役に徹したいってずっと今やってるけど、ここはそれを求めなかった。自分を大切に、自分の視点を損なわれずにすむ。自分の置きたいポジションが取れる。	自分の役割が固定され、自分の視点、望むポジションが取りにくい。
22歳女性	15	居場所、役割がある	自分の居場所があった。せなんいかんかった。役割があった。ラブ LOVE フレンドシップ 2001をつくらなんいかんかった。最初からいたから、創らなきゃいけないという役割があった。なんかこう、刺激がもたらされた。いろんな人の考え方とか出会いとかあったし。そうやってやっていくうちに、学べるものがあった。	
	16	学びがある	具体的に学べるものをあげると、Kさんの「心の栄養」、考える事は難しかったけど楽しかった。Mママの「喜んでの精神」…。	
	17	頑張ってる人達との出会い	がんばって生きている人たちに出会った事。	
	18	ここでしか話さない話、とことん話す	みんなやさしかった。怒っても素でいられた。何も隠さず、そのままの自分でいられた。学校でも学校なりの暖かい付き合いがある、こゆい付き合い方が。でもね、ここではここでしかいわない話とかあった気がする。家族の事とか、友達とはそんな深く話したりせんし、性の事とかも、自分は卒論とか、興味があるけん、性の話はするけど、別にともだちとは性の話はしない。自分がなんか知りたい事とかを、ここでは話せた。ワークショップ創りやワークショップへの参加を通して、とことん話せたのがよかった。真剣に会話をするのも楽しかった。	家族や性については深く語らない友人関係
	19	社会を知る	ともだちとかとはテレビの話とか学校の先生のいやだった事とか、好きな人の話とか、そんな話はあるけど、ここでは社会の事とか、知りたい事を知ろうとした。すごく刺激があった。	社会問題を語り合う事の少ない友人関係
	20	話す、考える、一緒にいる楽しさ	話す事の楽しさ、考える事の楽しさ、みんなと一緒にいることも楽しかった。	
	21	いろんな活動をしている人との出会い	すごい刺激を与えてくれる人が欲しかった。学校の先生とか、いろんな活動をしている人とか、会えることがすごく楽しかった。	
	22	新しい事ができる	新しい事をしたかった。オリジナルじゃないけど。	
22歳男性	23	自信が欲しい	社会に出る前の大学生だし、イベントの経験とか、ボランティアの経験とか多少はあって、社会との接点がある場が大学時代にあって、何か自分の中に刺激だったり経験だったり、自信がほしいというのがあって、そういう経験の一部にしたいっていうのが、一番あったかな。	

	24	競争ではない 人と人とのつな がりの暖かさ	「こおいう人間関係ってすごいいな」って思った部分もあって。人とのつながりのあったかさがすごいいな。こういうの、やっぱりあるんだっていう風に思えて、やっぱりきたいなあって後から思えるようになった。…今まで生きてきた時は、学校でも部活でも、勝たんといかんとか、目立たんといかんとか、人より優れとかんといかんとか、そおいうのばっかりだったような気がする。…一定レベルっていうか、割り切ったレベルでしか付き合え無いと。だからもうその発想が思い浮かばない。それが欲しいとか、そういう発想自体が思い浮かばない。	競争関係、割り切 って付き合う人間 関係
	25	自分が大きくな るとい確信	やるかやらないか悩んだ時期もあったけど、徐々に、自分の身になるとか、やりがいと、ななみ的にすごく面白いとか、絶対自分の身になるとか、もちろん性っていう分野も自分のものすごい大切なものだし、プラスにはめていけば、すごく自分が大きくなれるっていう風に思えてきた。就職活動とかより、むしろ大切なんじゃないかと。この活動は人を大きくすると思うよ。絶対。	
	26	日常的な関わり	やっていこうって思ったきっかけは、ワークショップ作りより日常的な関わりの方が僕にはでっかい。何でもない事でも話ができる空気とか、ワークショップを創る時だけとか会議の時だけじゃなくて、違う事でも関わりが持てる事。	
22 歳 女 性	27	自分の専門と のつながり	実際のうちの大学って、対話の練習とか無いんです。こういう感じて言うのしかなくて、ただ文面に落としてあって、それだけで現場に入っているのになって思ってたら、Kさん(外部講師)の話があって。大学ではそのトレーニングっていうのは無くて、ここでは実践的にトレーニングができるのかなと思ってきた。自分の専門性につながっているんだと思ったらもっと興味が出てきた。	実践の少ない大 学教育
	28	尊敬できる大人 の存在。目指す ものがわかる	尊敬できる人が近くにいるってことは、目指すものがわかるから幸せ。それを受け入れながら自分の中で変えて、なんか自分でまた、それを見つけていく。そおいう人たちがいっぱいいた。	
	29	あきらめていた 大人との対話	部活の経験しないから、一方的な大人のイメージがしないから、まあ、あきらめているんですね。最初から話すのを、自分の意見を言うのを。それが対話できた。すごい喜びがあった。自分をそこから、ばんばん出せるようになってきた。	一方的な大人イメ ージと、話す事を あきらめていた自 分
	30	自分と向き合う	ここは何が違ったかって言ったら、自分の嫌な部分、心の闇みたいなものがある、自分の心に。それって、言わなければ人にはわからない事、別に見せなくても仲良くやっていける、けど、たまにそれがすごい苦しい。それはなんか、出したらいけないような気がしてたし、でもそれを結局ここでは出さないといけなくなって(ワークショップ創りの過程で)、自分とすごく向き合わされたし、うん…。その時の自分が闇を出せたことがすごいすっきりした感じがして。	自分の嫌な部分、 心の闇を出しては いけないと思っ ていた自分
	31	集まりの後の場	ここが終わって、ご飯を食べに行く。私、一緒にご飯とか、飲んだりしながら人と会話するのが好き。そおいう、集まった後で生きるって言うような場所が好き	
	32	いろんなスキル を学ぶ	ママ(YWCA 会員)のうちで、ごませんべい作ったり、お金の作り方って言うか…。他の所で自立しとんでもお金を作る能力に欠けてるっておもって。こういう風にしてお金を作るんだとか、すごく感心した。多分いっぱいいろんなスキルを学ぶ事が多かった。	お金を作る能力に 欠けている自分

さらに、①～③は、若者の中に学校とは異なる方法で人生に必要なスキルを学んでいるという意識を高めていた（「学びと成長」）。「対話」と時間の経過は、彼らの関係を日常的なものへと発展させ（「日常的な関わり」）、仲間意識を生み（「仲間意識」）、つながりを強める手段になっていた。そして彼らは悩みつつも「この活動は人を大きくするとおもうよ。絶対」という自分自身が発見した「成長への確信」を生み出していた。以上から、①～③の働きかけによって生まれた「活動を通じての自己実現」「出会いと目標の発見」「社会的スキルの学習」は、「学びと自己の成長をもたらす活動動機」、④の働きかけによって生まれた「対話」と自然発生的に生まれた「日常的なかかわり」や「仲間意識」は、他者との関係が生み出した「活動を継続する力」と位置付けた。

5. 考察

今回調査した若者は、特別に希薄な人間関係の学生ではなく、むしろ学校外の活動に積極的に参加する学生達で、活動範囲も友人関係も広く、多彩な生き方を望む現代の若者の特徴¹¹⁾を持っていた。彼らは、大人より若者の気持ちを捉えるのが上手く、ピア活動は彼らにとって、刺激、経験そして自信を与え、自己実現のきっかけになっていた。「居場所・役割がある」（発言15）「この活動は自分を大きくする」（発言25）等はそれを表していると思われる。何らかの問題や課題を意識して、その解決のために自然発生的に集まったピアの集まりではなく、外部から活動機会を与えられて集まる思春期保健のピアの場合、彼らの活動が定着するには、自己実現への欲求を満たすような刺激や学びの機会だけでなく、仲間意識やつながりが育つことが必要ことがわかった。

①～③の働きかけは、若者がピア活動に興味関心を持つには有効だったと思われる。専門の知識を持たない若者の弱点を補う意味で、性問題の情報提供ができる当事者や専門家との協働や10回のワークショップは、新鮮な出会いを提供し、社会活動に必要なスキルの学習になっていた。しかし、これらはいくまで受身的体験であるため、活動の初期の動機にはなりえても、長期的、主体的な動機につながるかは疑問である。活動を継続し、彼ら自身が力をつけていけば、専門家との協働は少なくなり、活動そのものも新鮮さを失うからである。

しかし④の働きかけは、彼らの主体性を引き出す可能性を持っている。傾聴は、ピア活動にとって二つの重要な意味を持っている。一つは他者から傾聴されることでそれまでストレスに隠されていた自分の心が見え、自分の声を聞けるようになり、そこから力が生まれてくる¹²⁾。「自分のことを落ち着かせて出す事ができる」（発言6）「いろんな感情を覚える。それはなぜなのかと一回考える」（発言7）等はその事を示している。もう一つは、他者との関係性によって自分が成長することを、体験から学ぶことができる。ピア・カウンセリングは自己決定の援助といわれる¹³⁾が、その自己決定を支える共生関係に気づく事はさらに大切なことである。堀は10代のピア・カウンセリングについて、「子どもは子ども同士で、支えあい助け合って力を回復していくことができる」と述べている¹⁴⁾。今回の発言の中には、対話によってそのことを実感した発言はなかったが、それは活動1年目という時間の短さも影響していると思われる。ピア・カウンセリングを覚えた若者が、時間の経過と共にさまざまな問題にぶつかる中で、傾聴や対話をもたらす力を仲間間で実感したとき、彼らはこの活動に主体的になっ

ていくと考える。パウロ・フレイレは、対話と学習を主体に状況を対象化し、その状況を自覚的に主体的に変えていく過程を意識化と名づけ、人間がより豊かになるための最重要概念とした¹⁴⁾。

さらに彼らは活動と対話の繰り返しの中で、「競争ではない人と人とのつながりの暖かさ」(発言24)「みんなの事が好き」(発言13)という感覚を生み出し、仲間意識を形成している。彼らの目が社会の子どもや若者ではなく、自分たち同志に向けられていること、共通の課題や問題による結びつきではなく、「あたたかさ」や「好き」という感情で結びついていることは1年目の一つの重要な特徴である。組織が自分にとって居心地の良い居場所になることが次に大切な要素で、同時にこれはありのままを受け入れようとする傾聴の姿勢がもたらしていると思われる。

1年目の活動から、PDYYYは若者に「他者との関わりの中で安心して自分の位置と将来の方向性を確認できる居場所」¹⁵⁾を提供していたといえよう。変化の激しい社会の中で、自分が目指すべきモデルを発見できず、学校社会に身を置くだけでは社会とのつながりを実感しづらい若者たちが、ピア活動を通じて社会を知り、対話によって仲間とのつながりを生み出し、成長を促す活動としてこの活動を位置付けようとしている。しかし、1年目の活動理由は、自己の成長、仲間のつながりが中心で、対社会に対する思いは見られなかった。2年目はこのことを受けて、社会に対する思いも活動を支える動機になるように支援を試みたい。

6. 終わりに

①最初の企画提示とその後の活動機会の提供 ②性問題を語る当事者・専門家との学習会、合同ワークショップの実施 ③組織運

営に関するノウハウの提供 ④傾聴の学習と会議での実践という1年目の働きかけから生まれたピア活動を振り返り、活動が継続した要因を探った。その結果、初期の活動は「活動を通じての自己実現」「出会いと目標の発見」「社会的スキルの学習」等、学びと自己の成長に関わる動機と、「対話」によって自然発生的に生まれた「日常的なかかわり」「仲間意識」等、仲間とのつながりがもたらす継続の力が存在していた。

今後ピア活動が、若者によってより主体的になされるには、傾聴や対話がもたらす力を仲間感で実感し、その関係が彼ら自身の手によって対社会の中で広く実践され、深められていくような支援がもとめられる。

引用文献

- 1) 松本清一、我が国における思春期保健の歩みと現状、周産期医学、Vol.32, No.4: 444~448 (2002)
- 2) 高村寿子、今、なぜ、思春期保健でピア・カウンセリングなのか、助産婦雑誌、Vol.55 No.8: 67~72 (2001)
- 3) 岩崎 榮、「エイズ・ピア・エデュケーション」の全国展開のシステム構築に関する研究、厚生科学研究費補助金研究班(エイズ対策研究事業)分担研究報告書、
- 4) Vincent J.D`Andrea and Peter Salvey, Peer Counseling, Palo Alto, California: 3~16 (1996)
- 5) 安積純子、障害をもつ人とピア・カウンセリング、立岩伸也編、自立生活への鍵、ヒューマンケア協会(東京)、19~28 (1992)
- 6) アキイエ・ヘンリー・ニノミヤ、ピア・カウンセリングの基本理念、立岩伸也編、自立生活への鍵、ヒューマンケア協会(東京)、7~13 (1992)
- 7) 高村寿子、性の自己決定を育てるピアカ

- ウンセリング、小学館（東京）、43～58
（1996）
- 8) 松下 拡、健康学習とその展開、勁草書
房（東京）、1～4（1990）
- 9) 仲宗根正、地域における思春期保健、思
春期学、Vol.19, No. 1 : 58～67（2001）
- 10) 2001年度 PDYYY活動報告書、熊本
YWCA/PDYYY（熊本）、113～116
（2002）
- 11) 土橋信夫、大学生の価値観はどう変わっ
たか、現代のエスプリ293 : 111～121
（1991）
- 12) 鈴木秀子、愛と癒しのコミュニオン、文
春文庫、55（1999）
- 13) 堀 正嗣、子供の権利擁護と子育て支援、
熊本学園大学付属社会福祉研究所、227
（2003）
- 14) パウロ・フレイレ、被抑圧者の教育学、亜
紀書房（東京）、261（1979）
- 15) 水野篤夫、居場所づくりの指導者論、田
中治彦編、子ども・若者の居場所の構想、
学陽書房（東京）、204～225（2001）

Youth Participation in Adolescent Peer Health Education - Major Motivational Components of Youth Peer Education and Effective Strategies to Support Taking Initiative and Leadership

Mari Kusaga, Kyoko Tawara, Rimiko Ookusa

Abstract

The purpose of this study was to investigate why youths continue their peer activities taking initiative and leadership. By analyzing interviews of six youths (3 male, 3 female; the average age is 21), 8 components were discovered; 4 related to motivation, which are 'self-realization through the activities,' 'dialogue,' 'encounter with other people and discover goal,' and 'social skill acquisition'; and 4 related to the power of promotion, which are the 'opportunity for learning,' 'daily relationships,' 'peer connectedness,' and 'potentiality for self-development'. Those took effect of 'affirmation of development'.

To initiate effective peer activities in the future it is recommended that the following components be used, 'encounter with other people,' 'dialogue,' and 'skill and opportunities for social participation,' and that the use of 'the learning opportunities,' and 'interactive relationships,' should be considered, and practice and experience in the society.

Key words : Health Education for Adolescence, Peer Education, Taking Initiative, Development, Peer Connectedness